SUZURAN LETTER
vol.06
December 2024

岩手大学女性活躍・
ダイバーシティ推進基金（すずらん基金）ニュースレター

すずらんレター

「皆が自分らしく生きられる社会に
～学生の視点から見るダイバーシティの未来～」

対談

岩手大学男女共同参画推進学生委員会（GESCO）
代表 遠藤諒子　副代表 土田珠緒

司会：岩手大学副学長・ダイバーシティ推進室長　海妻 径子

岩手大学男女共同参画推進学生委員会（GESCO：ジェスコ）は、「男女共同参画について学び、岩手大学生に発信すること」を目的に2012年度から活動している学生委員会です。男女共同参画以外にも、セクシャルマイノリティ（LGBTQ等、性のあり方として少数派の人たち）やリプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康と権利）等、ジェンダーに関連する問題に興味を持ち、積極的に活動しています。自分たちが生きている環境にジェンダーの問題があることを10代から認識し、自ら行動を起こしている学生たちに、大人の社会のダイバーシティ推進はどう見えているのでしょうか。大人たちに期待することや今後の展望について聞きました。

GESCOのこれまでとこれから

海妻：GESCOとして今まで取り組んできたこと、これから取り組みたいことはどのようなことですか？

遠藤：今までやってきたことは、岩大の女子学生のエンパワーメントにすごくつながる内容だったと思っています。例えば、去年開催した性的同意についての勉強会は、各参加者の生活の中で実践できる内容でしたし、「自分を責めない」こと等について学べる良い機会でした。その他の活動も、学生が知りたいことや知っておいていた方が良いことにリンクしている内容だと思います。

これからの取り組みですが、岩手大学の中でGESCOの活動がなかなか

届いていないので、どういう風に届けていくか、女子学生やセクシャルマイノリティの学生のエンパワーメントにちゃんと繋げていくためにはどうしたらいいかを考えていきたいと思っています。

土田：私は教育学部所属なので教育関係に繋げていきたいです。GESCOの活動を通して、まず大学から少しずつ変えていけたらと思っています。それと、女性も、セクシャルマイノリティも、男性も含め、全員が「ジェンダー問題はみんなに関係すること、自分らしく生きることとジェンダーは関わっていること」と思えるような、未来に繋がる活動をGESCOとしてやっていきたいと思っています。

海妻：早稲田大学のシャベル※1の皆さんを招いた勉強会は刺激になりましたか？

遠藤：シャベルの皆さんは早稲田大学の先生達と連携して、活動の紹介や報告を授業で行っているということで、GESCOの活動の仕方に参考になる、すごく良い機会になりました。

海妻：学生の活動にもロールモデルが必要なんですよね。岩手は大学が少なくて、ジェンダー関係でも「こういう活動もできる、やっていい」というロールモデルが少ないですからね。モヤモヤはあるけどどういう活動に結びつけたらいいのか、GESCOの中だけでは思いつきづらいのではないですか？

土田：ジェンダー問題を問題として意識していない学生が多いと感じています。まず、問題提起から始める必要があるので、どんな活動をしたらいいのか、難しいです。ロールモデルが少ないのもそうですし、岩手県では活動がしにくいと感じています。

海妻：ジェンダーの問題って、気付く人は気づくんですよね。だから、気付かない人に「はて？」と思ってもらうかは、ノウハウを知らないと難しいですよね。

岩手大学男女共同参画推進学生委員会（GESCO）
代表　遠藤諒子

遠藤：私たち自身が勉強して、問題の洗い出しから、「問題を解決していくためには何ができるか」というところまで行けたらいいなと思っています。ただ、メンバー以外の人にはなかなか興味を持ってもらえないので、きっかけ作りを続けていく段階かなと思っています。メンバーの学びを深める活動とメンバー以外の人へのきっかけ作りの活動にはギャップがあるので、どういう風に活動していけばいいか難しいなと思っています。

海妻：日本社会は、私が皆さんぐらいの時から変わってないと思います。深めていくべき部分と、広くやっていくべき部分と両方あって、あっという間に4年間終わっちゃう、みたいな感じでしょ？

土田さんの「教育に繋げたい」という話に関して言えば、日本は、諸外国と比べて、小学校の先生は女性が多いけれど、中学・高校の先生に女性が少ない、というのが問題のひとつです。また、ジェンダーの問題は中学では遅いので小学校から教育しようという意見もあるのだけれど、私はむしろ、小学校の頃には性役割から自由な子ども達が、中学生・高校生になって、世の中の処世術として性役割を学習してしまうと思っています。

土田：私が通っている英会話の教室でも、上級コースは男性の先生、初級コースは女性の先生です。教育の現場で自然と性別役割ができちゃっているんですよね。そういうところを子ども達も見ているんでしょうか。

海妻：アンコンシャスバイアス（無意識の偏見）の問題が最近よく言われるのは、やっぱりそういうところだと思いますよね。

大人社会のダイバーシティ推進

海妻：GESCOの活動をどのように将来につなげたいですか？また、皆さんはちょうど大学のときに、世の中で女性活躍が声高に言われていて、LGBT理解増進法もできましたが、大人の社会のダイバーシティの状況はどのように見えますか？

岩手大学男女共同参画推進学生委員会（GESCO）
副代表　土田珠緒

土田：アルバイト先では女性がパートで働いていることが圧倒的に多いし、職場復帰の形が限られていると感じます。

関係のない話かもしれないですけど、育休・産休について、以前、海妻先生から「職場で、育休を取った同僚の仕事をカバーした人に対しても何か手当があるべきだ」という話を伺って、確かにその通りだと思いました。それが「本当の意味で働きやすい職場づくり」ということだと思います。でも今、それは叶っていなくて、カバーした人に不満が生まれてしまう。大人の社会のダイバーシティ推進にはすごく大きな負のループが、まだあるなと思います。

遠藤：ノンバイナリー※2の知人が働く会社は、レインボー認定※3がされているのですが、実際にはトイレの問題や更衣室の問題がまだあると聞きました。明文化されたルールがあっても、実際にそれが必要な人（女性やセクシャルマイノリティの人等）に届いているのかとか、フィードバックや希望にちゃんと取り組んでいるのかという点では、特に岩手県や地方では実態が伴ってないのかなと思います。

海妻：本当にその通りで、「思いやりで差別は解決しない」と言うけれど、ダイバーシティ推進宣言だけで変わるわけじゃないですからね。難しいのは、実際に困っている人は少数だということなんです。多くの人がぶつかっている問題は問題だと認識されて社会も変わるけれど、少ない人がぶつかる問題は「文句を言ってる人が我慢すればいいのに」となりがちなんですよね。皆が困っていることを優先すれば、マイノリティの問題は後回しになるわけです。

学生が望む支援とは

海妻：GESCOや岩手大学の学生に対して、どんな支援があると嬉しいですか？

遠藤：GESCOに関して言えば、GESCO以外のジェンダー問題を届けるために、授業の一部の時間をGESCOがお借りできればと思います。GESCOの活動についても、先生方や各部署の人でGESCOのために時間を少しあげてもいいという人達がいたら、すごくありがたいです。

学生に関しては、授業でグループ分けをするときに「男子」「女子」で分けたり、男子と女子で呼称を変える等、ジェンダーについては不十分なところがあると思うので、そういう細かい部分で学生への接し方が変わってくると、もっといいのかなと思います。

土田：今の話聞いて、男性・女性という区分だけじゃなくて、一人の人間として扱われることが大事だと思いました。授業で言えば、もっとジェンダー関係のことを取り入れてもいいのになと思います。例えば、教育の授業で取り上げられるジェンダーの問題は、子どもたちのトランスジェンダーの問題「しか」ないんですよ。性的指向について取り上げることがない。実際に配慮すべきことはそれ以外にもたくさんあると思うので、そこが残念だと思っています。それから、教員は特殊な職業だと思うので、教育学のことだけではなく、女性が教員になったらこういうライフプランが

実現しやすいというようなことを、もっと教えてほしいと思います。

海妻：ライフプランのサポートは、本当は地域の男女共同参画推進センターやダイバーシティ関連の施設が、専門性があるスタッフの力を借りつつ、社会事業としてやっていくものだと思います。

今の、トランスジェンダーだけが取り上げられるという話で言うと、日本のようにジェンダーギャップ指数が低い国は、そもそも社会が「ジェンダーの問題がある」と認めてない、わかってないのだと思います。だから、女性の社会参画が進んでないのも、「女性が頑張らなかったからだ」とか、あるいは、女性の生き方はこれからの世代で変わるんだ、みたいな。永遠にその「これから」は来ないんだけど(笑)。「これから」は来ないというのは、既存の生き方とか既存の社会の在り方に迎合した方がやっぱり楽という話になりがちになってしまうわけ。だから、社会全体がジェンダーの問題があるということをもっと認識していく必要が確かにあると思います。

学生のロールモデルの話で言えば、国立女性会館(NWEC：ヌエック)で、全国の女子学生達のユースリーダー養成のような研修をやってますね。

遠藤：去年の夏休みに、ジェンダーについて文章とか論文を書きたい学生向けのセミナーに参加しました。ジェンダー関連の本が集まった図書館があって良かったし、普段交流できない他大学の学生や先生と関われるとても良い場所だと思いました。

海妻：ユースリーダーが全国的に交流するってすごく大事だと思います。国連も世界的なユースリーダーの交流には力を入れています。

遠藤：GESCOの中では、大学を卒業した後の継続的なつながりがあまりなくて。ジェンダーについて活動「する」側を増やしていくには、GESCOの継続的な流れをつくっていくことが必要だと思っているところでした。

海妻：GESCOで大学の若い世代として色々変える経験をもったというのを、就職しても続けて行って欲しいし、その中でお互いの活動の交流とかリソースを提供し合うということがあるといいですよね。

卒業生と繋がれたらやりたい具体的なことはありますか？

海妻径子 副学長
ダイバーシティ推進室長

遠藤：上の世代の人たちにほとんど会ったことがないので、どれくらいの人がいるのかもわからないんですけど、これからのことについてだと、私は自分が大学を卒業するまでに、卒業生がGESCOをサポートできるような仕組みを作りたいと思っています。

土田：ジェンダーの問題は時代とともに変遷していくわけですが、GESCOが10年以上活動してきた中で、それぞれの問題をどのように解決してきたのかということにすごく興味があります。解決しようとしたけれどもあまり変わってないのなら、それこそ現メンバーの私たちが活動するチャンスにもなりますよね。だから、上の世代との交流はたしかにいいなぁと思います。上の世代のお話を聞いて、気付かなかった問題に気付ける機会にもなると思うし、もっと幅広い視点を持てるんじゃないかと思います。逆に自分が上の立場になったら、やってきたことを後輩に伝えていきたいと思います。

海妻：本学で女性初の副学長である菅原悦子先生は教育学部の教員だったので、GESCOのメンバーやぱるんひろばの育児ボランティアをしていた学生は教育学部が多かったと記憶しています。だから、教員になっている人も多いと思います。

遠藤：現メンバーは人社の学生が多いのですが、他の学部でGESCOの活動をしていた方のお話も聞いてみたいですね。

海妻：本当は全学部にGESCOメンバーがいて、今度は○○学部がメインで活動を進めるという感じでできるといいんですけどね。

土田：確かに学部ごとの取り組みがあってもいいですね。

海妻：海外と比較すると、ジェンダーに関連したNPO、NGOの活動自体が日本はすごく低調なんですよね。フランスでは、プランニングファミリアル(Planning Familial)という家族計画、要するに性教育に関する女性団体の歴史が長いんですけど、そこに中高の女性の先生たちがたくさん参加していているんです。だから学生たちもセクシャリティの権利の問題等には関心がある。学生の時に「この世の中がおかしい」とか「もっとこういう風に変えて行こう」という活動が盛んじゃないと、社会に出てから、その組織の中で自分がどううまくやればいいかというところに留まってしまって、世の中や職場を変えようという風にはなかなかなれなくなってしまう。でもそれだと、特にジェンダーの問題って変わっていかない。だから4年間のGESCOの活動だけで終わるんじゃなくて、「大学を変える」ということを学生たちが普通にやれるような環境を作っていった上で、社会に出たあとも、「学生の時に大学を変えることができたんだから」と自信をもって、「職場も自分たちが声をあげて変えていくんだ」と風になれば、世の中も変わっていくのではないかと思います。お二人もそれぞれの職場で、そういう風になれるといいですね。

遠藤・土田：頑張ります！

※1　シャベル：早稲田大学において「性的同意」の概念を広めることで、性暴力の根絶を目指す学生の団体。「シャベル」には「(根を切る道具としての)シャベル 」と「(性について)喋る」という意味が込められており、性について真面目に話せる環境づくりにも取り組んでいる。出典：「シャベル」ウェブサイト。

※2　ノンバイナリー：いわゆる「男性」「女性」のどちらにも分類されない性自認のあり方。出典：パレットーク著『マンガでわかるLGBTQ+』講談社

※3　レインボー認定：work with Pride(以下、wwP)が策定している「PRIDE指標」において2021年に新設された、日本社会でのLGBTQ+に関する理解促進や権利擁護について、国・自治体等との、セクターを超えた協働を推進する企業を評価する認定。「PRIDE指標」とは日本初の職場におけるLGBTQ+などの性的マイノリティへの取組みの評価指標。出典：work with Pride ウェブサイト

対談場所　ぱるんひろば(岩手大学学生センターA棟2階)

岩手大学で働き、学んでいる教職員や学生が、子育てと研究・業務・学業の両立を図ることへの支援を目的とする、学内保育スペース。GESCOの活動にも使用している。

岩手大学男女共同参画推進委員会(GESCO)
ホームページ
https://gesco.jimdosite.com/

「多様性に欠かせない男性のリーダーシップ」講演会開催

7月12日岩手大学上田キャンパスにて「多様性に欠かせない男性のリーダーシップ」と題した講演会を開催し、講師に公益財団法人山田進太郎D&I 財団COO 石倉秀明氏を迎えました。

講演会で石倉氏は、日本の男女格差は人事制度等の構造的要因が大きく、その構造や差異を生み出しているのは男性であることを指摘。現在の人事制度は、フルタイムで毎日働ける転勤できる人等を前提としており、子育てや介護等の負担を男性より多く担っている女性はフルタイムで働くことが難しく、キャリアをあきらめざるを得ない現状であると話されました。

また、「 男性は透明な下駄を履いている」と表現し、男性であるだけで有利な構造は存在するが男性には普通のことなので気づかない、男性多数の環境では反対意見や違和感を覚える意見が届かない等、マイノリティの人が本来の実力を発揮できない環境になっていると説明。男女が同じような土俵に立てるようにするためには公平性（エクイティ）が大切であると話しました。最後に、日本のジェンダーギャップ問題は「事実」として存在する、これを次の世代に残しますか？それとも自分は差別していないから関係ないと言い続けますか？せっかくなら「性別」に関係なく誰もがやりたいことをやれる、性別によって不公平な差異がない社会の方が良くないですか？と問いかけました。

聴講者からは、「男性社会を作り上げてきた男性に対しては男性リーダーの声のほうがより響くことが期待できるのではないか、ということに共感した」「マイノリティが孤立しないように数のバランスを考慮することが重要で、些細なことの積み重ねが包括的な環境形成に必須だとわかった」等、多様性を推進する上での理解が広がりました。講演会の冒頭で本学の小川学長はトップメッセージとして「男性にとっての『あたり前』から変わることが問われている。多様性溢れる大学の実現のため男性のリーダーシップをともに発揮していきましょう」と、本学教職員及び一般参加者を含め120名程の聴講者（会場、オンライン、アーカイブ配信含む）に呼びかけました。

講師の石倉秀明氏

講演会の様子

鷹觜テル賞第4回記念展示開催
—横田チエと鷹觜テル— 母子を護（まも）った岩手大学ゆかりの女性たち

2024年度岩手大学優秀女性大学院生学生表彰「鷹觜テル賞」第4回記念展示「— 横田チエと鷹觜テル — 母子を護（まも）った岩手大学ゆかりの女性たち」を10月11日国際ガールズデーから11月2日まで、本学図書館アザリアギャラリーで開催しました。4回目となる今回は、盛岡市議会、岩手県議会の初の女性議員であった横田チエ（1901-1979）と本学初の女性助教授となった鷹觜テル（1921-2000年）の功績を紹介する内容で、県内各地を中心に多数の来場者がありました。

横田チエは、戦前は岩手における無産政党の中心人物であった夫・忠夫の活動を支えますが、夫は1940年（昭和15年）に自死し、自らが母子世帯となる経験。二児を抱え独り切り抜けたチエは、戦後、女性に参政権が付与されると、1947年（昭和22年）には盛岡市議に、1959年（昭和34年）には岩手県議に、それぞれ初の女性議員となって各3期、計24年間を務めあげました。その間、特に母子福祉の充実を訴え、内職への行政指導の充実、寡婦の相互扶助団体・岩手みどり会協議会の創設と、その会員である母子に対する就労の場の確保や貸付制度の確立、ホームスパンを授産する婦人共同作業所「みちのくあかね会」の設立などに尽力しました。

鷹觜テルは、萌芽期の栄養学研究に戦前より携わり、新制・岩手大学初の女性助教授となって、戦後は県内各地の児童や妊産婦の栄養改善に尽力しました。岩手医科大学の住民健診などとも連携した実地調査、科学的・実証的な栄養学研究、そして生活改良普及員や保健師と協力した健康改善事業に長年取り組みました。それにより、いわゆる「僻地」農村の人々、とりわけ子どもや妊産婦を含む女性のような、弱い立場の人々の健康向上に貢献しました。

チエはみどり会やみちのくあかね会などの女性団体のメンバーの女性たちと、テルは生活改良普及員や保健師という専門職の女性たちと、力を合わせて母子が置かれた状況を変えようとし、共に活動した女性たちに大きな学びと勇気をもたらしました。

展示の様子

2024年度　岩手大学優秀女性大学院生学長表彰「鷹觜テル賞」受賞者決定

集合写真

優れた研究活動等を行っている本学の女性大学院生を学長が表彰する「岩手大学優秀大学院生学長表彰」は2012年度の制度創設以降12回目となります。これまで、今年度の受賞者を含めて119名の方が受賞しています。2021年度から本表彰の通称を「鷹觜テル賞」とし、副賞は2023年度からすずらん基金を財源としています。本年度は８名の応募があり、厳密な審査の結果、最優秀賞１名、優秀賞２名が決定しました。最優秀賞には15万円、優秀賞には５万円の副賞を授与し、学会・シンポジウムの参加旅費、実験試料の購入費、調査研究に係る費用を支援します。10月11日には、岩手大学本部棟にて表彰式を開催し、審査委員長である小川学長から審査講評や受賞者による研究概要の発表のほか、すずらん企業である株式会社岩手ファーム専務取締役兼総務部長 中村 真理子様、株式会社夢実耕望取締役兼経営企画部長 田山 真由美様よりゲストスピーチを頂戴しました。

2024年度「鷹觜テル賞」受賞者コメント

最優秀賞

「層状複水酸化物を触媒前駆体として用いたカーボンナノチューブの合成に関する研究」

千田 知香
理工学研究科
自然･応用科学専攻

この度、鷹觜テル賞最優秀賞を受賞し、大変光栄に存じます。この栄誉は私個人では成し得なかったものであり、指導教員の會澤純雄先生をはじめ、研究室の皆さんのご協力に本当に感謝しています。鷹觜テル賞では、分野問わず女性研究者の支援をしていただけることで研究活動がさらに発展し、新たな挑戦が可能となっていると実感しています。また、女性研究者同士の輪の広がりも感じています。今回の受賞を糧に、自ら積極的に研究に取り組み、次世代の女性研究者の目標となれるよう励んでいきたいと思います。

優 秀 賞

「無核化ブドウの果粒発達における各植物ホルモンのはたらきに関する研究 」

石川 ひかる
連合農学研究科
生物生産科学専攻
（山形大学配属）

このたびは鷹觜テル賞優秀賞をいただきましてありがとうございます。本研究は、ブドウの果粒発達に関する重要な基盤的知見が得られるだけでなく、他の果樹類や果菜類における植物ホルモンのはたらきを検討する上でも非常に有益であると考えています。私は将来、研究者となり園芸分野の発展に努めたいと考えています。そのための努力を今後も続け、自身の研究や能力について広く世界に発信していくつもりです。最後になりましたが、指導教員である渋谷知暉准教授をはじめ日頃よりお世話になっております全ての方々に感謝申し上げます。

優 秀 賞

「タンパク質膜挿入に関わる糖脂質MPIaseの真核生物ホモログの同定と構造機能解析」

日景 瑠那
連合農学研究科
生物資源科学専攻

この度は、鷹觜テル賞優秀賞を賜りましたことを、大変光栄に思います。昨今、多様な分野において女性が活躍していることは、大変喜ばしく大きな励みとなっています。女性の社会進出が進んできているのは、鷹觜テル先生を始めとした先輩女性研究者のご尽力のおかげであると深く感謝しております。今回の受賞の経験を糧とし、将来的には大学や公的研究機関で研究者として働きたいです。今回、この賞をいただくにあたり、指導教員の先生を始めとし、ダイバーシティ推進室の皆様方、そして、すずらん基金へご寄附を賜りました皆様方に、この場をお借りして御礼申し上げます。

岩手大学名誉教授 菅原悦子先生が第10回女性技術者育成功労賞を受賞

岩手大学名誉教授（元理事・副学長）の菅原悦子先生が、8月8日、女性技術者育成功労賞を受賞しました。

女性技術者育成功労賞とは、ダイバーシティー推進活動を積極的に進め、産業界への女性技術者登用・任用推進の支援活動を行っている一般社団法人技術同友会が、女性技術者・研究者の育成に顕著な成果をあげた個人や組織の方々の功績をたたえるために、2014年に創設した賞です。今回の「第10回女性技術者育成功労賞表彰式」では、菅原先生を含む11名の個人と９つの企業・団体が表彰されました。

菅原先生は、本学の女性研究者や女子学生が働きやすく学びやすい環境や仕組みづくりに取り組み、岩手大学教育学部教員として、多くの小・中・高教員養成、食品化学分野の多くの有為な人材養成、岩手大学の女性研究者比率大幅増、工学部（現理工学部）の女性教員増、工学部初の女性教授誕生に貢献するなど、女性技術者・研究者・学生の育成に関して多大な功績を残されました。今回の賞はこの功績をたたえるものです。

菅原悦子先生受賞の様子

岩手大学ダイバーシティ推進室の取組紹介

すずらん基金　感謝のつどい

6月24日、すずらん基金へ個人40口以上（20万円以上）、法人10口以上（50万円）寄附をいただいた方々を招待する「すずらん基金感謝のつどい」は、今回で3回目となります。今年度は、すずらんサポーターとして澤藤隆一様、すずらん企業として川嶋印刷株式会社から菊地慶矩会長と盛岡支社の古舘龍一副支社長にお越しいただきました。本学からは、小川学長、水野理事、海妻副学長・ダイバーシティ推進室長が出席し、女性活躍推進に関する意見交換や、本学に期待すること等について懇談しました。

感謝のつどい当日の様子。岩手大学本部棟にて。

「パープル・ライトアップ2024 ～NO性被害・NO性暴力 キャンパスをみんなでつくろう！～実施」

パープル・ライトアップとは、性暴力の根絶を目指し、「女性に対する暴力をなくす運動」期間（11月12日～11月25日）に内閣府が全国的に実施を呼び掛けている取組です。本学では、「女性に対する暴力」に加え「ジェンダーに基づく暴力」を許さないという強い意思を表明するため、2022年度から毎年実施しています。今年は11月12日～16日の5日間、岩手大学正門付近を紫色にライトアップしました。今回はライトアップ期間に併せ、GESCO（岩手大学男女共同参画推進学生委員会）の活動紹介展示も行いました。これからもこの取組をとおして、学内外に性被害・性暴力根絶のメッセージを伝えていきます。

「生理用ナプキンを無料で必要な学生に届けたい！」クラウドファンディング

2025年度から予定している、学生に対する生理用ナプキンの無料配布。配布するナプキンの購入資金と、ナプキンを入れるディスペンサー（ケース）を製作する資金として、目標金額を28万円に設定し、クラウドファンディングを行いました。総額で35万円のご寄附があり、無事、ナプキンが必要な学生に無料で提供することができることになりました！ご寄附をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。今後、継続的にナプキンを配布していくため、クラウドファンディングも毎年行っていく予定です。引き続き本取組の応援をよろしくお願いします。

小学生向け！ サイエンス教室by工学GIRLS

8月4日、理工学部所属の女子学生で構成される団体「工学GIRLS」との共催で、小学生を対象に、理科実験教室を開きました。このイベントは、内閣府男女共同参画室による「理工チャレンジ（通称リコチャレ。女性たちが理工系分野に進むことを応援する取組）」に参加して行っているものです。開催は今年で4回目。今年は過去最多の60人を超える小学生の参加がありました。アロマオイル入りのせっけん作りやつかめる水の体験等、楽しく親しみやすい内容で、楽しかった、また参加したいといった声がたくさん寄せられました。

サイエンス教室の様子

工学GIRLSは他にも
小学生向けの実験教室を
開催しています！
詳しくは工学GIRLSの
ホームページをチェック！

「女性のキャリア形成支援リカレントプログラム2024」開催報告

働く女性を対象とした「女性のキャリア形成支援リカレントプログラム」を今年度も開講しました。若手対象のベーシックコース（カリキュラムⅠ～Ⅳ連続講座）は、今年度は20名、県外からの参加も複数名ありました。カリキュラムⅠ～Ⅲのセミナーには延べ62名の単回参加がありました。9月13日には全課程を終え閉講式を行い、20名のコース受講者が、本学副学長はじめ上司がオンラインで見守る中、一人ずつ自分のキャリア目標を堂々と発表しました。受講の中で感じたこと、刺激を受けたことを語り、学んだことを即実践して見やすい資料に工夫したり、それぞれにプログラムの成果を感じさせる発表でした。9～12月は上級編のアドバンストセミナー（全3回）を開講しており、充実したプログラムとなっています。

閉講式の発表の様子

ベーシックコース2024修了の記念写真

女性活躍・ダイバーシティ採用フェア

本学の女性教員数増を目指し2022年度から実施している採用フェア。今年度は9月に「令和6年度化学系学協会東北大会（秋田大学）」「日本物理学会第79回年次大会（北海道大学）」、11月に「第65回高圧討論会（いわて県民情報センターアイーナ）」に出展し、本学の女性研究者支援制度等の取り組み説明により、来場した女子学生や研究者に直接的なアプローチや意見交換ができました。

日本物理学会第79回年次大会（北海道大学）

岩手大学女性活躍・ダイバーシティ推進セミナー・2024年度岩手大学PI力（研究室主宰能力）向上研修「『介護をしながら働く人』をどう支えるか」開催

11月22日、いわて県民情報交流センター（アイーナ）にて、仕事と介護の両立に関するセミナーを開催し、会場とオンラインを含め、約70名の参加者がありました。独立行政法人労働政策研究・研修機構 副統括研究員 池田 心豪 氏からは、「これからの仕事と介護の両立支援～大介護時代の女性活躍に向けて～」と題しご講演をいただきました。またパネルディスカッションでは、共催の社会福祉法人盛岡市社会福祉協議会からご紹介いただいた盛岡駅西口地域包括支援センター所長補佐 佐藤 晋作 氏、すずらん企業である東京海上日動火災保険株式会社からご紹介いただいた東京海上日動ベターライフサービス株式会社ソリューション事業部担当課長 泉 洋枝 氏をお招きし、それぞれ「介護が必要となった時の知っとくべきポイント」「産業ケアマネジャーが伝える『介護への費用の備え』の重要性」についてお話しいただいたあと、池田氏を交えてディスカッションを行いました。参加者の立場は様々ですが、「労務管理担当者として今後取り組むべき課題に生かしていきたい」「予備知識を持つことができ漠然とした不安を減らすことができた」「今回のセミナーで全体像を見わたしながら整理して把握することで理解が深まった」といった感想があり、非常に有意義な時間となりました。

会場の様子

独立行政法人労働政策研究・研修機構
池田 心豪 氏

盛岡駅西口地域包括支援センター
佐藤 晋作 氏

東京海上日動ベターライフサービス（株）
泉 洋枝 氏

活動紹介パネル展示

北東北女性研究者 研究・交流フェア2024

9月27日、北東北女性研究者 研究・交流フェア2024を開催しました。本フェアは、北東北地域の女性研究者の研究活動の活性化、女性研究者間および企業等との相互交流、ネットワーク形成を目的としています。

第1部パネルディスカッションでは、パネリストに、千葉 茂樹 岩手県立大学理事長、酒井 明夫 岩手医科大学副学長、小川 智 岩手大学学長、ファシリテーターに、矢島洋子 いわて女性活躍エグゼクティブアドバイザー（三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社執行役員）を迎え、「県内大学男性トップリーダーに聞く、女性リーダー育成の課題」をテーマに、各大学における現状と課題について話し合っていただきました。参加者からは、男性トップリーダーの生の声を聞いて、「本気度を見ることができた」「トップリーダーの意識が大切」「風土や環境づくりが重要」「今後に期待している」など、関心の高さや今後への期待が伺えました。

ランチタイム交流会では、県内外・学内外の女性研究者、学生、企業・団体からの参加があり、年代や分野、職種の異なる参加者が楽しそうに交流や意見交換をしていました。参加した学生にとっては、先輩研究者の体験談や経験を聞くことで将来をイメージする良い機会となったようです。

第2部ポスターセッションでは、県内外・学内外の女性研究者や学生がとても活発に意見交換をしていました。参加者からは、「分野の異なる研究を知ることで新たな見地を得た」「良い刺激を受けた」などの感想があり、充実したセッションとなりました。

今回の研究・交流フェアは、延べ120名程の県内外・学内外からの参加者を得て、大盛況のうちに幕を閉じました。

パネルディスカッション

ランチタイム交流会

ポスターセッション

すずらん基金第1期の寄附状況と第2期開始のお知らせ

2021年10月1日に募集を開始したすずらん基金は、今年9月末をもって第1期を終了しました。寄附総額は9,637,000円。これまで岩手大学の女性活躍・ダイバーシティ推進の取組に賛同いただき、ご寄附をいただいたこと、深く感謝申し上げます。

2024年10月1日からは、第2期の募集を開始いたしました。引き続き温かいご支援のほど、よろしくお願いいたします（第1期の使途：鷹觜テル賞副賞、育児や介護を抱えた研究者への支援員経費補助等についても、引き続き募集いたします）。

第2期　目標金額 1,000万円

募集期間　2024年10月1日～2027年9月30日

使途

①女性研究者を上位職に登用するための差額人件費の支援
②女性研究者が業績を積むための海外渡航に対する支援
③女子学生のリーダー人材育成に対する支援
（岩手大学男女共同参画推進学生委員会の活動や「理工チャレンジ※」の開催等）
④その他、岩手大学の女性活躍・ダイバーシティ推進に資する事業への支援

※理工チャレンジ：女子中高生・女子学生が理工系分野に興味・関心を持ち、進路選択（チャレンジ）することを応援するため、内閣府男女共同参画局が中心となって行う取り組み。通称「リコチャレ」。

副学長（ダイバーシティ・環境マネジメント担当）／ダイバーシティ推進室長

海妻 径子

「今号編集を終えて」

ダイバーシティに関する意識は、若い学生たちの方が、教職員よりも柔軟で進歩的。授業などでは「いかに現実の方が、学生たちの意識にくらべて遅れているか」を教えることになってしまうこともしばしば。そんな現実を、学生なりに変えようとしているGESCOの活動を、もっとお知らせしたくて、座談会に登場してもらいました。他方で、元・男女共同参画担当理事の菅原悦子先生が、女性技術者育成功労賞を受賞され、貢献があらためて顕彰されました。世代間のバトンは確実に引き継がれています。

編集後記

７頁でご紹介したセミナー「『介護をしながら働く人』をどう支えるか」。介護は自分ではコントロールできないライフイベントですが、「ヒトゴトではない」と認識し、しっかり備えをしておけば対応できると、勇気をもらいました。様々なライフイベントがありながらも働くことに勇気や希望が持てる、そんなセミナーをこれからも企画していきたいです（菊池）。

［編集・発行］ **岩手大学ダイバーシティ推進室**
〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-8
Tel：019-621-6998 / 6038　Fax 019-621-6999
E-mail equality@iwate-u.ac.jp
HP：https://diversity.iwate-u.ac.jp
すずらん基金HP

女性活躍・ダイバーシティ推進基金 すずらん基金
岩手大学 IWATE UNIVERSITY